

統治性研究はインフラにいかによりアプローチできるか？

西川 純司

はじめに

それでは発表をさせていただきます。神戸松蔭女子学院大学の西川と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほどちょっと紹介していただいたんですけども、もともと私は、今日の議題に直接関係する Michel Foucault を研究している Foucault の専門家では、全然ないんです。もともとは歴史社会学の分野から、簡単にいうと、窓ガラスっていうのがどういうふうにして近代の日本に受容されていったのか、モノに着目しながら社会の編成をみていくっていう、そういう研究をしています。窓ガラスっていうものを考えることは、当然そこから何が入ってくるのかということとも関連してまして、特に、日光というのが近代日本においては重要な要素であって、とりわけ公衆衛生上重要な要素であったというところから、たとえば水のようなものとして日光を捉えられないかと。つまり、日光というのが、街のなかにどういうふうに取り入れられていて、普及していった、家のなかに取り入れられていくのか。そういうインフラを通して日光というものを考えられないかというところから、インフラに興味を持っていったというところがあります。そのなかでも、今日の発表の内容でもありますように、Foucault による、あるいは Foucault を引き継いだ人たちによる統治性研究というアプローチが、ひとつ有効ではないかということで、今日はその内容について発表させていただきます。

本報告の目的

今日の内容自体は、以前発表させてもらった、あるいは *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 の方に書いたもの¹をメインにしておりますが、一部ちょっと変更しているところもあります。統治性の観点からインフラストラクチャーにアプローチすることの有効性を明らかにする、考えてみるというのが、この報告の目的です。先に結論めいたことを言っておくと、Foucault、あるいは Foucault を引き継いだ人たちがやっている統治性の議論には、とりわけ非人間、Foucault 自身はこういう言葉は使っていないんですけども、いわゆる人間ではないモノとか、そうした部分を分析できるような射程が実は含まれていたんじゃないかということ、明らかにしたいと思います。Foucault というと、言説分析であるとか、あるいは表象の分析の人っていうところがどうしても大きいかと思うんですけども、その著作を読んでいくと、実は、ちゃんとモノについてしっかりと考えているところがあるので、そこを抉り出していこうと。それをどういうふうに活かすことができるか、あるいは、どこに限界があるかというのを、今日はちょっと見ていこうと思います。

¹ Nishikawa, Junji, 2017, "Governmentality and Materiality: A New Approach to the City," *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 12-19.

もうひとつ付け加えて言っておくと、先ほどの植田さんの話にもありましたけれども、日常生活をある物質が支えていく、インフラなりが支えていくというのは、普段は見えないわけですが、たとえば災害であるとか、何か事故が起こったときに、今までこういうものに支えられていたんだっていうのが、初めて目に見えてくるわけです。けれども、それ以外の方法として、もうひとつ、歴史的に見るという方法論もあるのかなと思っています。今は当たり前だと思っているインフラの形が、歴史的にはある程度偶然によって作られてきたものなんじゃないかと。つまり、そういう歴史的なアプローチも可能じゃないかというところがありまして、そのあたりも実は、Foucault がやってきた歴史研究とも接点があるだろうということで見ただけならばと思います。

今日の内容ですけれども、最初に、最近海外で蓄積されている統治性研究をいくつか簡単にレビューしたあとで、Foucault 自身の議論のなかに分け入って、とりわけ環境概念といったものを取り出してみようかというのが、報告の見通しということになります。

国内における統治性研究をめぐる動向

ちょっと内容に入る前に、先ほどもありました 2013-2014 年あたりの発表から今回の原稿を書いていく間に、統治性研究っていうのは海外ではどんどん進んでいて、もはや私が書いたものは古くなっているんじゃないかということが、実はあります。それに関連して、たとえば国内の統治性研究でどういうことが起こっているかという、Nikolas Rose という、Foucault の研究をしていた非常に有名な人がいるんですけども、その人が出した本の翻訳が出ています。

『生そのものの政治学』²であるとか、あと、『魂を統治する』³という本が翻訳されました。これが、ここ2年くらいの動きですね。もうひとつ、これも統治性研究で、海外では教科書的に使われるような本だとされている、Williams Walters という人の『統治性』⁴という本、これも今年7月に翻訳されました。こういうことを考えていくと、今までは、統治性ってどういうものだったっていうのを、特に物質性みたいなものと関連付けて見ていくときに、国内ではなかなか参照するものがなかったんですけども、実はちょっと状況は変わりつつあって、もう十分知ることができるんじゃないかというところがあります。もうひとつ、これは国内じゃなくて海外で、今日の報告のなかでも出てきますけれども、Thomas Lemke という人が2015年に書いている論文⁵がありまして、それも今回の原稿とかなり似てしまった部分があるので、ちょっとまずいなというところがあります。いずれにせよ、この翻訳であるとか、そのなかで触れられていない部分というのも当然あるわけですし、そこを見ていきたいと思っています。ちょっと前置きが長くなりましたが、本論に入っていきたいと思っています。

² Rose, Nikolas, 2006, *The Politics of Life Itself: Biomedicine, Power, and Subjectivity in the Twenty-First Century*, Oxford: Princeton University Press. (=2014, 檜垣立哉監訳『生そのものの政治学——二十一世紀の生物医学、権力、主体性』法政大学出版局.)

³ Rose, Nikolas, [1989]1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self, second edition*, London: Free Association Books. (=2016, 堀内進之介・神代健彦監訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社.)

⁴ Walters, Williams, 2012, *Governmentality: Critical Encounters*, London: Routledge. (=2016, 阿部潔・清水知子・成実弘至・小笠原博毅訳『統治性——フーコーをめぐる批判的な出会い』月曜社.)

⁵ Lemke, Thomas, 2015, "New Materialisms: Foucault and the 'Government of Things'," *Theory, Culture & Society*, 32(4): 3-25.

統治性研究とは

まず最初に、統治性研究といっても、いったい何のことだということがあるかと思えますので、簡単に確認をしていきましょう。統治性、いわゆる *governmentality* といわれるものですが、これは Foucault によって 1977 年から 1979 年にかけて考察されたひとつの概念でして、とりわけ 1990 年代以降の英米圏で、Foucault の後継者によって、より大きな展開をみせているひとつのアプローチであります。たとえば、Nikolas Rose や Mitchell Dean らが有名ですね。ただ、狭い範囲に限らず、いろんな学問分野に既に取り入れられていて、社会科学はもちろんですが、政治学とか法学とか地理学とか、いろいろな分野でこの統治性というアプローチがとられているので、それも含めるとかなり膨大な量の蓄積が海外ではなされています。

では、統治性の分析っていったいどういうことだということを書いておきました。これは本当に一番一般的というか、抽象的にとった定義なんですけれども、「ある行為が他者の行為可能性の領域を構造化する手段・方法」、それを権力ととるわけですが、その権力の行使を分析していく、それが統治性の分析であると一般的には言われています。もちろん一般的な意味っていうものに触れてはいるんですけれども、Foucault 自身は特に近代国家の統治術みたいなものをずっと考えていくわけですね。とりわけ、自由主義がとっている統治術みたいなものを分析しているのが、Foucault 自身ということになります。

英国における統治性研究

先ほども言ったように、統治性研究自体は、Foucault の後継者によって、かなりいろいろ進展しています。いくつか著名な人はいるんですけども、ここでは、Nikolas Rose という人がどうしているのかというのを簡単に紹介しておきます。Rose はこういうふうに統治を定義しています。基本的には、さきほど言ったものと同じですが、「振る舞いの導き」、*conduct of conduct* といわれるものですが、すなわち「ある目的に向かって他者の行動へと働きかけるプログラムであり戦略であり技術」、それが統治であると定義をしています。ある人の振る舞いをどういうふうに導いていくのかという細かな知識、あるいは技術というのを分析していくわけですが、そのなかで Rose が着目している点でより特異性があるのは、都市、あるいは都市のインフラに着目している点かなと思います。具体的にちょっと読むと、近代の支配システムは、「国家と非国家的権威」、あるいは専門家とかですかね、そして「インフラ権力」って彼は使っているんですけども、いわゆるインフラが持っている力ですね、それと「権力の諸ネットワーク、諸機関の活動」、こういったいろいろな要素によって成り立っている。それらに依拠して、実は近代の支配システムというのが作られていったというのが、彼の言っていること、あるいは明らかにしようとしていることです。なので、決して国家だけではなくて、いろいろなアクター、あるいはモノ自体が、何かしらの権力作用を持っているんじゃないかというのが、特徴的なところですかね。それに則って、彼自身はすごく具体的な歴史分析をしていくわけですけども、そのなかで、18-19 世紀あたりのイギリスの統治性のあり方を分析していて、都市インフラに対する介入が、いわゆる自由な、リベラルな社会の可能性条件を構成していったんじゃないかということ、具体的に明らかにしていきました。ここで彼が言っているのは、「自由を通じた統治」って書いていますけれども、決して権力が直接的に何か介入していくわけではなくて、一見その社会はリベラルで自由主義っぽく見えるんだけど、実は物質、あるいはインフラなどを通してうまく調節されているんだということを明らかにしたのが、彼の研究です。

それ以外にも、Thomas Osborne という人とかですね。やはり 19 世紀のイギリスの公衆衛生に着目しながら、狭い意味での医学的な実践だけではなくて、都市の存続の条件である下水と

か排水の調整をすることによって、実は都市の公衆衛生っていうのが保たれていくんだと。つまり、インフラへの介入があったことで、社会というのは成り立っていったんだというような分析を、同じように統治性にに基づきながらしていくとすることがあります。

統治性研究の進展と課題

こういったものを挙げていったらきりがないので、ちょっとこの辺でやめますけれども、このように、国外の統治性研究においては、実は Foucault の議論に基づいたインフラに関する研究というのは、すごく蓄積されています。その特徴をもう一度確認しておくと、都市の統治における物質性、つまりインフラの重要性や役割を強調しているということです。しかし、国内においては、Foucault が物質性とかインフラについてどういうふうに言っていたんだということについて、実はあまり紹介がなされていないんじゃないかというのが、私が思ったことです。だからそれをやろうと思ったんですけど、さっきも言ったように、最近はずっとそれがなされているので、このあたりはまたひとつ、新しいことをしていかないと駄目かなというのがあります。

先ほども言ったように、今日の目的というか、私が書いたものの目的としては、Foucault の議論それ自体に、実は、物質性の萌芽というか、そういうものを分析するための萌芽っていうのがあったんじゃないかということを見たいということで、以降では、Foucault に限定して話をしていこうと思います。

生権力、人口、安全メカニズム、公衆衛生

Foucault の議論を読まれている方からすると当たり前だけれども、あまり触れたことがない方からすると、ちょっととっつきにくいところがあるかと思いますので、大まかに、本当に簡単な定義をしておきましょう。

Foucault は、18 世紀半ば以降の西欧社会における権力のメカニズムを、彼の有名な言葉ですけれども、生権力というもので分析をしようと思いました。その生権力というのは何かというと、とりあえずここでは、生物としての人間の群れを調整・管理する権力だとしておきます。その生権力はいったい何をターゲットにしているのかということ、それは統計学的に把握される人口といわれる概念だということに特徴があります。この人口というのは、たとえば、健康の水準であるとか、寿命であるとか、あるいは死亡率など、統計学的に把握される特徴によって認識されるある対象で、生権力というのは、そこを目指していくものだと考えています。さらに進めていくと、人口という固有の領域がつくられるわけですが、それが、安全メカニズムといわれるものを通して調整され管理されていくんだというのが彼の議論でして、その安全のメカニズム、つまり統治の術なんですけれども、その具体的な表れのひとつが、たとえば公衆衛生だったりします。なので、公衆衛生という安全メカニズムを通じて人口に介入していった調整・管理していくのが生権力であるというのが、Foucault の議論の組み立てです。生権力といっても、実は、言っている箇所によってちょっと定義が変わったりしているので、必ずしも完璧な定義だとかそういうつもりは全然ないんですけども、ひとまず大まかに、そういうことは言うことができるだろうということです。

これが一般的な理解というか、広く知られているようなところなんですけれども、しかし、この人口概念について、Foucault はもうちょっと複雑なことを言っていたんじゃないかというのが私の議論のポイントでして、以降で、それをちょっと見ていきます。

「人口」概念再考

Foucault は、あるテキスト⁶⁾において、こういうことを言っています。17 世紀から 18 世紀にかけてのポリスとは、「社会集合体」を管理する手段、あるいは統治技法 (Foucault 1979=2001: 11) であるという話を、とりわけ、健康政策の話をするときにもってきます。ポイントとしては、社会集合体って何だってことなんですけど、ここで言われている社会集合体について、こういうふうに彼は言っています。「複雑で多様な物質性 (matérialité) であって、それは、個人の『体』を越えて、彼らの生活を保証し、その活動の枠組みや結果を構成し、移動や交換も可能にするような、物質的要素全体を含んでいる」(Foucault 1979=2001: 11) と書いていて、これが社会集合体だというわけです。もう一度言い換えているのが次のところですけども、彼がいうポリスという歴史的に出てきた概念は、「社会集合体の肉体的要素を引き受ける、いわば、この市民社会の物質性をである」(Foucault 1979=2001: 11) という文章が出てきます。ここで言っている肉体的っていうのは、物理的っていう意味も含まれていて、ここに出てくる市民社会の物質性、物質的な側面をである、と考えることができるだろうと思います。この市民社会の物質性という概念に、私はちょっと着目していて、いろいろ考えられるなと思っているんですけど、実はこのテキスト以外では今のところ見てないです。ここでたまたま触れただけなのか、こういう言葉を使っただけなのか、ちょっと分からないですけども、しかし、実は重要な概念じゃないかなと思っています。特に物質性というところは重要なかなと思っていますが、続けていきましょう。そして、話はずっと続いていくんですけど、「この物質性」、つまり市民社会の「物質性の中心にある要素が現れてくるが、その要素の重要性は、17 世紀、18 世紀において常に強化されて高まっていく。それは人口である」(Foucault 1979=2001: 11) というふうに、ここで「人口」という言葉が出てきています。こういうことを読み解いていくと、実は、「人口」という概念は、単に統計学的に把握された集合っていうことよりも、より正確に言うのであれば、物質的な要素の総体、社会集合体って言っているわけですけども、その社会集合体のなかにおいて分節されるひとつの形象という意味じゃないか、figure っていうことじゃないかということです。つまり、分節される形象のあり得るひとつが「人口」というものだということです。これは結構重要なところかなと思います。

「環境」概念

これだけだと、ちょっとよく分からないと思いますので、もうちょっとだけ、Foucault が繰り返してくれているところがあって、それがどこかというところ、次のところ、1977-1978 年講義の『安全・領土・人口』⁷⁾の初回のなかで、やはり安全メカニズムというものの説明をしているんですけども、そこで今度は「環境へと向かう政治技術」という話をしています。これが公衆衛生なんですけども、ちょっとここをもう一度見ていきましょう。ここで、「環境へと向かう政治技術」って言うときの「環境」っていうことがポイントになってきまして、milieu という言葉を充てているんですけども、これもやはり、Foucault は次のように言ってくれてい

⁶⁾ Foucault, Michel, 1979, “La politique de la sante au 18e siecle,” *Les machines a guerir. Aux origines de l'hôpital moderne*, Bruxelles, Pierre Mardaga, coll. « Architecture-Archives », 7-18. (=2001, 中島ひかる訳「一八世紀における健康政策」小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成 8 政治/友愛』筑摩書房, 6-22.)

⁷⁾ Foucault, Michel, 2004, *Sécurité, territoire, population: Cours au Collège de France (1977-1978)*, Paris: Gallimard & Seuil. (=2007, 高桑和巳訳『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義一九七七-一九七八年度』筑摩書房.)

ます。「環境とは何か。ある物体が他の物体に距離をおいて及ぼす影響を説明するために必要なものです。つまりそれはある作用の流通の指示体・境位です。つまり、この環境という概念において問題となっているのは流通と因果性という問題です」(Foucault 2004=2007: 25)と彼は言っています。簡単に言うと、「環境」という概念がこの時代に出てきたということ、ここで言っているわけです。「環境」というのはもともとは物理学の用語で、離れた物体同士が影響しあうことを説明するために出てきた物理学の概念が、この時代に初めて生物学的に応用されるようになった。つまり、生物学のなかでも、この「環境」という概念が出てくるようになったということを書いているわけです。距離を置いて影響を及ぼすというのは、英語だと *action at a distance* が充てられているわけですが、これは後々Rose が「遠隔統治」という言葉で呼んでいるものと一緒です。ただ、Rose は、Latour からもってきているらしいので、ちょっとその関係は微妙ですが、同じ言葉ですね。遠隔の統治というのと近いです。

もうひとつ注ですが、そのなかで出てきた「環境」とっていったい何かというところですが、「ある作用の指示体・境位です」と書いてあるんです。これもちょっと、日本語だといまいちよくわからないんですけど、英語では *medium* だとして書いてあります。つまりメディアだと、媒体だと書いてくれているわけですね。

もう一度まとめると、「環境」とは、単なる人工物とか、いわゆる我々が普通の言葉で言っている環境という自然環境ではなくて、離れたもの同士がある影響を及ぼすことに媒介の役割を果たしているものが「環境」だということになります。この概念が出てくることによって影響関係を記述できるようになったというのがここでのポイントでして、それを具体的にどういうふうに考えているかという、18世紀の建築家や都市計画家は、この概念に見合った図式のなかで、つまり環境概念に基づいて都市空間に働きかけ整備するようになったとされている。具体的にはどういうことかという、「環境とは、河川・沼・丘といった自然的な所与の総体」だけじゃなくて「個人や家の密集といった人工的な所与の総体です。環境とは、そこに住まうすべての者たちに関わる一群の効果」(Foucault 2004=2007: 26)であったとしています。つまり、「環境」に働きかけることによってそこに住まう者たちに何かしら影響をあたえてくれるもの、それが「環境」だということになります。

ということで、こうして「環境」を通して働く安全メカニズム、直接的にダイレクトに身体に関わるんじゃなくて、あるクッションを置いて遠隔統治をするかたちで働く安全メカニズムというのが目指しているのは、いわゆる法権利の主体、つまり主権権力の対象でもなくて、あるいは規律的身体としての諸個人でもなく、つまり規律権力の対象でもなくて、それは「人口」だと。で、「人口」とっていったい何かという、「自らが身をおく物質性に根底的・本質的・生物学的に結びつくという形でのみ存在するような個人の集合」(Foucault 2004=2007: 26)で、そこに働きかけていくというのが、この「環境」概念の重要性であると言っています。なので、ここで重要なのは、先ほども出てきた「人口」という概念ですが、あくまでもそれは物質性に根付いているということがポイントかなと思います。だから、物質性に結びつく限りでの個人の集合のことだということですね。なので、「環境」に働きかけることによってその「人口」を管理できるし調節できるんだと。その「環境」とっていったいのは、その周りにあるような自然的所与であり、あるいは家とか個人だということになっています。ちょっと抽象的で難しいところもあるんですけど、そう考えていくと、実は、「人口」概念というのは、端的に統計的に把握されたデータであるとかって言う言い方はとてもできないということですね。あくまでも、物質性のなかから浮かび上がってくるひとつのかたちである、ということですね。その辺がポイントになってくるかなと思います。

統治性研究の有効性

じゃあ、こうした Foucault 自身の議論から辿っていくと、いったいどういうことが分かってくるのかというのが最後のところですよ。とりわけ、統治性研究の有効性というところを見ていきたいと思います。

最初に、理論的含意ですが、統治性とは、もう一度言うと、統治の合理性や戦略・技術といったものを調査し分析し、歴史化するための「工具箱」だとよく言われます。つまり統治性というのは、それを分析するための工具箱ですよ。今回の議論を見ていくと、Foucault というのは、非人間、つまり自然とか人工物に対して、実は政治的にすごく重要な役割を与えていたということが見えてきます。もう一度言うと、重要なことは、人間と非人間、つまり今回見た範囲でいくと、「人口」とその「環境」を、それぞれ自立した実体として捉えるのではなくて、それらが、いわゆる異種混交的な集合体、つまり、ここでの言葉で言うと、物質性のなかで、それぞれが分節化されていく、そういう歴史的な条件というのは彼は見ようとしているということになってきます。つまり、そういうふうに見ていくと、これは Foucault のこれまでの議論とすごく共通していますが、系譜学的な企てでもあるというわけです。つまり、歴史を超えたある実体とか、環境とか、インフラっていうものを定義するんじゃなくて、あくまでも歴史のなかで、それがどういうふうにして分節化されていったのか、何が自然とされて何が環境と言われて、何がそのターゲットになっていったのかというのは、きわめて、その実践のなかに根付いていることだということになります。

したがって、ここから私たちは、どういうことを引き出すことができるかということ、いつ、どこで、どのような条件のもとで、「社会」や「自然」、「インフラ」が現在のようなかたちで存在するようになったのか、という問いをまず立て、それを実証的に調査・記述する方法として、統治性というものを考えていくことができるんじゃないだろうかということです。これが最初に言ったように、都市生活のある種の自明性というか、物質的なものに支えられているって言ったとき、それを具体的にどう見ていくかというときに使える、ひとつの道具じゃないかなと思います。さらに、もうちょっと踏み込んでみると、「人間／非人間」とか、あるいは「社会／自然」といった区別を予め前提とする議論、これは従来の議論がとっているところが多いんですけども、そうした議論の枠組みとは違う観点から、実はインフラというものに迫れるんじゃないだろうかというのが、こうした統治性の議論から見えてくるものだと思います。

フーコーを超えて？

最後、ちょっと付け足しみたいなものなんですけれども、当然、だからといって、Foucault の議論でなんでもかんでも分析できるっていうわけではおそらくなくて、既にいくつか批判もされていますよっていうのが、最後に書いてあることです。とりわけよく言われるのが、次のところですよ。

Foucault は、いわゆる非人間にエージェンシーの概念を拡張しているか、つまり、モノのアクター性みたいなものを認めているのかということですよけれども、おそらくそれはないだろうというのが、私の今のところの考えです。あくまで、「人口」の主体性を議論しているのであって、モノのアクター性それ自体を積極的にとりあげているとまでは言えないように思います。つまり、非人間、自然とか人工物に、実は目を向けているんだという側面はあるけれども、しかし、それはあくまでも「人口」というものが出てくる、その可能性条件としてのみ物質を捉えているというふうに見えてくる。そう考えてくると、Bruno Latour や Jane Bennett の議論、つ

まりこれらは、いわゆる人間じゃないモノに対して、力を持っているんだというのを積極的に認めていく立場だと思うんですけども、Latour や Bennett と違うところは、やっぱりあるんじゃないかなと。これらのどっちがいいかっていうのは、いろいろ考える必要があるかなと思います。つまり、モノに力があるって言ってしまっいいいかっていうのは、なかなか議論が必要かなというところがあるので。

ただし、Foucault の後を継いでいる人たちからすると、次のようなことも言われます。「もし権力が実際にいたるところに拡散し広範にわたるものであり、振る舞いを導くことが分析の原則として重要であるならば、これら統治性の研究がほかの場所から」、つまり、国家ではないということなんですけれども、国家ではない場所から、「ほかの行為者から始めてはいけない理由はない」(Walters 2012=2016: 280)。その分析の出発点は、政府機関ではなくてもいい、つまりモノから始めてもいいんじゃないかということ、言っている人は多いです。あと、最初に見た統治性研究の最近の例のいくつかは、Foucault の影響もあるんだけど、どちらかという Deleuze=Guattari の影響の方が強くて、そのなかではやはり、非人間にもエージェンシー概念を拡張しているところがあります。ただ、これがいいのかどうかというのは、やはり議論の必要があるかなというのが、私の今のところの結論ということになります。ということで、以上で私の議論を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。